

第3回豊田市総合計画審議会 会議録

【日 時】 令和5年11月20日（月）午後2時00分～4時00分

【場 所】 豊田市役所南51会議室（南庁舎5階）

【出席者】

（委員）

阿垣 剛史	豊田市区長会会長
浅野 智恵美	市民公募
稲垣 令一	豊田市高齢者クラブ連合会会長
大河原 真吾	あいち豊田農業協同組合常務理事
大澤 正彦	日本大学文理学部情報科学科准教授 次世代社会研究センター長
大橋 宏	豊田信用金庫理事
加藤 真二	（一社）豊田加茂医師会会長
加納 実久	新とよパークパートナーズ会長 名古屋工業大学研究員
木村 匡子	関西大学社会学部准教授
幸村 的美	（社福）豊田市社会福祉協議会会長
澁澤 寿一	NPO法人共存の森ネットワーク理事長
中野 貴博	中京大学スポーツ科学部教授
野崎 健太郎	豊田市PTA連絡協議会副会長
畑中 直樹	大阪大学大学院工学研究科招聘教員
牧野 篤	東京大学大学院教育学研究科教授
丸井 康弘	市民公募
吉村 一孝	豊田商工会議所専務理事
安田 明弘	豊田市副市長
鈴木 学	豊田市副市長

（計19人）

【欠席者】

（委員）

稲垣 博貴	（一社）豊田青年会議所理事長
佐伯 英恵	（公財）豊田市国際交流協会理事長
永田 祐	同志社大学社会学部教授
弘中 史子	中京大学総合政策学部教授
松本 幸正	名城大学理工学部教授
湊 裕	連合愛知豊田地域協議会事務局長

【理事者】

太田 稔彦	（豊田市長）
（事務局） 辻 邦恵	（企画政策部長）
都築 和夫	（企画政策副部長）
阿久津 正典	（企画政策部副参事）

野依 真人	(企画課長)	花田 潤治	(都市計画課長)
丹羽 広和	(企画課副課長)	大光 圭二	(都市計画課副課長)
		今村 広和	(都市計画課主幹)
宮川 恭子	(企画課担当長)	西岡 雄志	(都市計画課担当長)
古田 祥久	(企画課主査)	加納 崇壮	(都市計画課主査)

【傍聴人】 2名

【議 題】 1 会長あいさつ

2 議題

(1) 策定の全体スケジュール

(2) 「(仮称)ミライ実現戦略 2030」(案)について

3 その他

今後のスケジュール

- ・ 第4回 令和6年 1月22日(月) 15:00～
- ・ 第5回 令和6年 5月22日(水) 14:00～
- ・ 第6回 令和6年 8月19日(月) 14:00～
- ・ 第7回 令和6年10月31日(木) 14:00～

【議 事】

■ 市長あいさつ

○市長

いろいろな事情があり2週間左足が使えずに、本日 C+walk という車椅子です。このような状態になって思うことがいろいろあります。豊田市はここ3、4年の間、健康寿命を延ばそうと言ってきていますが、健康寿命が終わったらどうするのが疑問でした。健康寿命の後にサポートを受けながら暮らす期間を快適期間とし、健康寿命と快適期間を合わせて幸福寿命と言っていきます。車椅子での暮らしをして、その後健康寿命の暮らしに戻っていく、大半の人の一生というのは健康寿命、快適期間の繰り返しであることを改めて感じました。いかに快適期間を短くするのですが、自分にとって快適期間は何なのか、改めて思いました。自分がその状態にならないとリアルにならないと思います。自分は、仕事がしたい、家族と暮らしたい、そのために選択したのが、車椅子で生活しようということです。松葉杖は難しいし、歩行器は嫌でそこで選択したのが車椅子です。楽しみながら2週間の自分なりの快適期間を過ごしています。実体験しないとわからないと改めて感じました。

昨日までWRCの開催に御協力いただきありがとうございました。まちなかで活躍していた方もこの中におられますが、地域も団体も含め、会場だけでなく、市内の至る所でいろいろな方の御協力により盛り上げていただきました。ありがとうございました。

■ 会長あいさつ

○会長

お忙しいところありがとうございます。先ほど市長が挨拶されたので、さっそく議題に入らせていただきます。

ここからの進行は私の方でさせていただきます。

本日は、主に全体スケジュールの確認と「（仮称）ミライ実現戦略2030」（案）について御議論いただきたいと思います。

先ほど市長から御挨拶がありましたが、豊田市としての考えもあり、更には総合計画に対して、10年先を見据えて達成するものとして計画を立てていくのか、あるいは羅針盤的に方向性を示すものとして、ある種の価値を共有し、そこからぶれないけれども、試行錯誤を繰り返しながら新しい未来を考えていこうとするのかについて、まだ議論することが残っているかと思います。本日の「（仮称）ミライ実現戦略2030」（案）の御議論をしていただく中で、第9次豊田市総合計画がどのような性格を持ったものになるのかも含めて、御議論いただきたいと思います。

■ 議題（1）策定の全体スケジュール（確認）

○事務局 資料①に基づいて説明

■ 意見交換

（会長）

全体スケジュールについて御説明がありましたが、御意見、御質問はございますでしょうか。

現時点では意見等はないようですが、後ほど何かありましたら、御意見、御質問をよろしくお願いいたします。

■ 議題（2）「（仮称）ミライ実現戦略2030」（案）について

○事務局 資料②に基づいて説明

■ 意見交換

（会長）

市長のお話とも関わりますが、国も特にウェルビーイングという言葉を使うようになっており、先程の健康寿命と快適期間に関しましても、医療界において社会的処方という言葉が出てきております。まず、病気になると一定以上薬事的処方を受けます。医療機関で診断をし、薬を処方する。その後でQOLを下げないよう様々な手当てになるのですが、最近、社会的処方という言い方が出てきていて、例えば、眠れないという症状に対して、精神科に行くと薬を処方される、これは薬事的処方なのですが、例えば、住んでいる近くにウォーキングのクラブなどがあれば紹介されて、活動に参加することで、よい人間関係を築き、身体を動かすことで、眠れるようになっていく、こういう対応が一つの社会的処方だと言われたりします。つまり、薬を使わなくても、むしろ人間関係を深めたり、様々な活動でつながっていくことを経験したりする中で、自らのQOLが改善されていくことが起こると言われ始めています。もう一つは、例えば、がん患者が最期まで病院にいられなくなり家に帰らざるを得なくなってしまう現実があるのですが、私の知り合いのがんの訪問医は、地元で空き家を

借りるなどをして、がん患者にとって良い環境を整え、がん患者が地域の方と一緒に生活できる場所を作る活動をしており、これも社会的処方の一つだと思います。最期を迎えるに当たり、人生を振り返ると様々なことがあったけど結果的に良い人生だったと思って最期を迎えることができるように、安心して暮らすことができる環境を整えていくことも含めて社会的処方という言い方が出てきており、厚生労働省からも奨励され始めています。

「（仮称）ミライ実現戦略2030」（案）について、特に学生との意見交換やまちづくりミーティングの中で、例えば、若者が自己実現やつながりを強く求めていることが出ています。まちづくりミーティングで、大人と子どもがつながるとい議論の中で、大人が子どもの「楽しい」を支えていくことで、子どもが主役になっていくという議論がありました。ただウェルビーイングについて、「よりよく生きる」、「よりよくある」、「よくある」という言い方がされているのですが、最近、本市の他の審議会でもDOERという言い方が出てきています。今まではDOよりもBEが大事だと言われてきましたが、DOにERが付いて、やり続ける人という意味になります。どういうことかと言うと、ビーイングとして社会に位置付けられていくと、気が付くと自分がDOERになっていくという言い方になってきています。地域に認められて自分がつながっている感覚が持てることによって、周りから自分の能力を引き出してもらえ。気が付くと自分はやらないではいられなくなって、やり続けている。それが例えば、学生が求めている自己実現がなされるということにつながっていく。やはり、つながりは大切になるし、自分の生きる場所がしっかりあるということが大事という議論ができるようになるのではないのでしょうか。

「（仮称）ミライ実現戦略2030」の案に関しても、地域の方からも同様の意見があり、次を見据えて社会を変えていく時につながりを大事にしたいという御意見が多く出ていると思っています。

（A委員）

一点目は、資料②-1の学生との意見交換に関して、どのような方法でまとめたのかが気になっています。我々がよく聞く、今の若者が考えていることが典型的に出ています。例えば「社会的地位を高める思想より、自己実現を主眼としている」や「漠然と明るい将来が展望できないことが、結婚願望や出産願望を下げている」と書いてあるが、身近の学生には社会的地位を高めたい、結婚もしたいと思っている学生も多くいます。言い過ぎなのかを慎重に見ていきたいし、多様性の時代では新しい価値観を得ることだけが多様性ではなく、今までの自己実現、社会的地位を高めたいと希望する人や結婚したい人をマイノリティにしないことが大切だと思います。

二点目は、資料②-2以降のロジックツリーの「直接成果」「初期アウトカム」について、記載のレベル感が適切なのかを伺いたいです。ラリーを生かしたまちづくりや水素戦略ならイメージできますが、教育の多様化の推進は何かわかりません。抽象的で具体的イメージにつながりやすいものをつながりにくいものが混ざっています。「直接成果」はイメージできるくらいまで具体化できると、目標が目標に終わらずに取組として豊田市の中で行われると思うので、積極的にイメージと結びつける議論をしてもよいのかと思います。

三点目は、資料②-5に「デジタル実装の推進」とありますが、この審議会の資料は、紙の資料で良いのでしょうか。市長も自分がその立場に立つとわかってくるものだと言われていて、デジタルを推進するならデジタルでやってみて、やりにくさに気づく方法もあると思

います。

(事務局)

一点目については、今まで感じていなかったことが印象に残り、書き過ぎているかもしれません。参考資料①-4で豊田工業高等専門学校、中京大学の意見がまとめてあり、豊田市の状況を説明した上で、市長と意見交換をしています。テーマとしては、学生なので働き方など、ある程度イメージがしやすいものに絞りました。その中で事務局が新たに気づくことや、印象に残った内容、多数出た意見を抽出しており、審議会資料としては偏っているかもしれませんが、多様性があるということが一番感じました。新しい感覚を持ち、多様性を受け入れる環境を持つ必要があると感じました。

二点目については、いろいろな意見を頂いていますし、事業ではなく施策を出していきたいと思っています。事務局としては、イメージできる表現まで至っていないので、表現方法などについて御意見がいただきたいです。

三点目については、議論しやすいように紙資料としていますが、検討したいと思います。

(B委員)

他自治体の総合計画にも関わっていますが、豊田市らしさはどこにあるのか疑問に思います。前に向かっていくエネルギーや、新たな提言が出ていないのではないのでしょうか。例えば、こどもをどのようにケアするか、引き上げるかは大人目線の話で、こどもは未熟なものという目線で書いていないのでしょうか。こどもを我々の地域づくりのパートナーとして捉えるならば、表現は変わってくるのではないのでしょうか。豊田市らしさは、モータースポーツが出ていますが、東京モーターショーも名前を変えてジャパンモビリティショーになっています。豊田市の産業転換を考えるに当たって、決して車づくりのまちではなく、福祉やいろいろな産業に関わるモビリティのまちに変わっていくことが求められています。

次に、山村部の視点があまりないと感じます。豊田市の特徴は山村部と都市部が隣接し、ワンセットで一つの生態系ができていくこと。そういった背景もあり、市町村合併したという経緯があります。防災を考えても東南海地震が起これば間違いないといわれており、東日本大震災では、青森から千葉の地層が動きましたが、東南海地震では三浦半島から宮崎までが動くと言われており、広範囲で自衛隊が助けてくれることはあり得ないです。東日本大震災の避難所では、食料、水、エネルギー、医療体制をどのように確保するかは自分たちで考えていくことで、今までは国に任せてきて自治を失ったことを避難所のリーダーが気づいていました。豊田市は、都市部と山村部があり、農地や山といった生存の基盤を有しています。このような自治体は、我が国でも珍しいと思いますので、都市部と山村部を一体的にまちづくりしていく視点を入れてほしいと思います。とはいっても、従来の交通ネットワークを広げていくことに税金を投入していくかという、費用対効果がどうなるかという議論が起きてくるので、中山間地域は地域自治を考えていただきたいと思います。地域が自分たちのことは自分たちでやっていく、どうしてもできないことを行政に助けをもらうというのが基本でないと、地域自治においては自分たちが主人公になっていきません。

旭地区の敷島自治区には「しきしまときめきプラン」があります。そのプランは我が国で最先端の地域自治の新しいかたちだと思いますが、中山間地の自治を立て直し、行政負担が将来にわたって増えないように考え、都市部の方が中山間地があることがメリットだと思うような取組までできると良いと思います。以上を留意して豊田市らしい総合計画を作ってほ

しいと期待しています。

(C 委員)

先日、PTAと豊田市の懇談会で学校の問題について意見交換があり、一つは不登校、もう一つは中山間地の学校の問題が出ました。都市部から山村部に移住した人の意見で、学校が小さいので、こどもの居場所がない。住んでいる人には当たり前かもしれないが、外から来た人にはそうではない。それらについて事前に説明もされていない。そういったことから、こどもが不登校になることが多いため、PTAになったと言っていました。稲武の方も足助の方も同じような意見でした。彼らは学校を統合していくべきという意見でしたが、大人の目線で言うと地域からこどもがいなくなり寂しくなるからやめて欲しいという意見もあります。資料②-2の「こどもが多様な考え方・生き方に触れる」については、ある程度の学校の規模がないと難しい。また、進学の場合も都市部と山村部が近いが、学校に通うのは難しく、下宿など田舎に行くほどお金がかかる。そういったことをどう解消するかを考えていけない。地域の学校をどうまとめるか。あるいは、ネットワーク化でつなぐ環境でも良いのかということも考えていきたいと思います。少なくとも、先生と保護者は、ある程度の規模がないと教育が難しいという意見があり、少人数学校が良いという直接的な効果が検証されていないので、こどもにとってどうかは正確な資料で判断していきたいと思います。

(会長)

小規模校のメリットは国が提唱してしまっていて、欧米では1学級の基準は20人です。教え方や先生の関わり方もありますが、保護者としては小規模では部活が組織できない、サッカーのチームが組めないことも含めて、豊田市の教育をどのように考えていくか議論ができればと思います。

さらに経済産業省が進めている未来の教室事業をどのように受け止めるのか。こどもたち一人一人にタブレットが行き渡る個別学習を進めていくときに、経済産業省は、企業の人材とこどもを直接結びつけることで、山村部でも最先端の学びができると言っており、豊田市ではどのようなことができるかが議論できると良いと思います。

(D 委員)

一点目は全体のトーンについて。先日、環境学習に対して文部科学省のヒアリングを受けましたが、こどもたちが非常に責められており大変な状況です。サステナビリティの語源は思いやりからきていますが、国連でサステナビリティデベロップメントというと、常に成長、発展しなければという恐怖感がある。ミライという言葉にも、常に前進しないと、という強迫感を感じます。

二点目ですが、ロジックモデルの視点から地域経済の循環的な話が見えにくいと思います。それは、経済、社会、環境を総合的に作るもので、良いものをより安くという消費行動も脅迫的。むしろ関わりを重視して消費行動し、部分最適よりも全体最適していくということが出てくるといいと思います。地産地消と言うと農業委員会の話になってしまいましたが、先日開講した脱炭素スクールでも同様の話をさせていただきました。

三点目は、脱炭素の話で、計画に基づきCO2を減らしていくが、経営者の方にはピンチでもあるがチャンスでもあることを脱炭素及び産業の部分に出せると良いと思います。

(会長)

ミライという言葉に言及されました。「探究活動」にも「探求しなければならない」とい

う強制的な印象があり、そういう意味で、まだ発展、成長、拡大という概念の中で動いている感じを受けます。関東大震災から100年経ち、未だに昭和が続いていて令和にならない、平成がなかったのではという学生もおり、我々が昭和の価値観で考えているということもあるかもしれません。また、地域の経済の循環、カーボンニュートラルの視点で地域の在り方をどのように考えていくかという御提案をいただきました。

(E 委員)

地域が自分たちのことを自分たちでやっていく、自分事化のことを考えると、参考資料①-2にあるように地域会議で意見交換するなど、丁寧に策定作業が進められていると思いました。

脱炭素について。資料②-5「直接成果」の中央に「交通ネットワークの効率化の推進」とあります。また、資料②-6「直接成果」に一番上に「脱炭素に対するインセンティブの構築」とあります。「交通ネットワークの効率化の推進」のイメージを教えてください。また、「脱炭素に対するインセンティブの構築」とはどのようなインセンティブが盛り込まれるのか教えてほしいと思います。

(事務局)

豊田市では、地域交通について地域ごとに住民相互の支え合いによる移動手段がどのようにあるべきかを議論しており、地域に合った取組を行政として支えていくとしています。例えば、名鉄複線化の議論も含め公共交通の速達化を目指しますが、公共交通に関する最適化など様々な思いを一言でまとめており具体化が必要と思っています。脱炭素に関するインセンティブも、SDGsポイントにとどまらず、来年度にかけてどのような事業をやるのかを考えていきたいですが、今の時点では事業は出ていない状況です。

(E 委員)

今年環境白書の再生可能エネルギーに関する記載で、再生可能エネルギーを使って発電した電力と電気自動車を活用したゼロカーボン・ドライブ「ゼロドラ」という言葉が出てきています。再生可能エネルギーへの期待は市民も大きいと思いますが、「ゼロドラ」について、あまり情報が出ていないので、豊田市とどう結びつくのだろうと思っています。

(事務局)

日本全体で電気だけでは足りなくなるので、新しい技術やエネルギーにチャレンジしていきたいと思っており、例示として、国は6月に水素戦略を出しましたが、豊田市も強く打ち出していきたい。再生可能エネルギーも最新動向を見ながら取り組んでいきたいと考えています。

(市長)

「ゼロドラ」はバッテリーEVを普及させるという前提なのですか。

(E 委員)

環境白書の概要版を見ると、前年度に引き続き今年度も国の補正予算が組まれています。公用車、社用車を率先して再生可能エネルギーを活用した電動化、地域住民の足として利用可能なカーシェアリングに供する取組を支援するなどあります。地域でも電気自動車を行政が率先しています。電気自動車の実現が身近になってきていると感じていますので、「ゼロドラ」の取組に関心を持っています。

(市長)

バッテリーEVに関して、豊田市は微妙な立ち位置になります。バッテリーEV車を日本国内で生産するとCO₂が多く排出されます。ライフサイクルアセスメントの考え方があり、生産、運ぶ、利用、廃棄ということですが、今回のラリーの一番上のカテゴリーで走る車はハイブリッド車で、燃料は合成燃料を使っており、CO₂を排出しません。下のカテゴリーのラリー2も同様のエネルギーを使っています。豊田市がこの強みを生かしてその分野で政策を展開しようと思うと、合成燃料の開発に対して豊田市がどうコミットするのか。豊田市らしい政策として議論したいと思っています。

(F 委員)

先日、中京大学の学生との意見交換に参加しました。資料②-1の「つながりへの受容性が高い」というより、つながりへの期待感が高く、自分もつながることによってライフプランが広がるんだということが個人的には響きました。

行政や市長を前にすると、学生も市に要望する意見が多くあり、行政は頼んだら実行してくれるのではないかと考えるのは、豊田市、日本、全世界共通なのかわかりません。要望する会でもあるとは思いますが、自分事化して自分で自治を進める住民が増えていくところの価値や可能性を勉強していきたい。逆に市がそのことを謳うと押し付け感があり難しいですが、検討しつつ取り込んでいけると良いと思います。

資料②-2、「こどもが多様な考え方、生き方に触れる」ところで、大人とこどもを分ける必要があるのか。こどもが多様というより、みんな多様のはずで、あえてこどもにフォーカスする意義が必要と思いました。

また、学び続けられないといけないのか。学び続けることの意義や可能性なども検討していいと良いと思いました。こどもを軸に据えていることで「こども」という単語をあえて並べないといけないのかが気になりました。

(会長)

計画は行政が作りますが、これからは当事者性や自治が大事になると思います。例えば、東京都杉並区の教育振興基本計画は、審議会の委員が区民や市民に対して私たちがやりましようと呼びかけをする形で作った経緯があります。私たちが豊田市民、当事者として動き、行政がサービスを提供するのではないと言えると思いますが、それは新しい総合計画の作り方としてあると思います。今までは行政が計画を立てて市民に提供する、行政サービスという形で提供されてきましたが、市民が主権者としてどのような市にしたいのか、どのような生活をしたいのか、それを実現していくための計画と言って良いと思います。「こども」と言わずに、未来に向けてとなると100年生きる時代になったので大人も含めて、議論して訴えかけていくという発言だったかと思います。

(G 委員)

住民の主体性の話題と関連すると思いますが、「初期アウトカム」のレベル感がバラバラという御指摘に同意すると共に、「初期アウトカム」が誰の成果なのかも曖昧です。行政として整備するのは行政の成果ですが、多様な働き方の創出は、企業と労働者の関係で生まれてくるもので、行政の立場で生み出すのは難しいと思います。そのため、誰がという主語を整理する必要があると思います。

また、資料②-1の取組目標には「〇〇のまち」と書かれており、右により具体的な項目が記載されていますが、「①こどもが多様な生き方や暮らし方が選択できるまち」の左右の

対応が他と比べると良くないと思います。資料②-2の3つの要素、こどもが多様な「遊び・学び・体験」を経験している、人生100年時代を誰もが学び合いいきいきと暮らしている、まちへの愛着・誇りが育まれている、これらを見ると、多様というより一つの方向に促している印象を受け、多様というキーワードとの対応がどうなのかと疑問を持ちました。

「こども」と書かなくても良いという意見もありましたが、こどもを中心にし、年齢によらず多様な生き方や暮らしを選択できるということが重要とありますが、資料では、こどもから大人への直線的な発達のイメージを持ってしまいます。こどものウェルビーイングに関して、もう少し良い書き方があるのではないかと思います。

(H 委員)

資料②-1で、ウェディングケーキ状の上の部分、人の視点に「学び合い」と「地域共生」から、今回「地域共生」が「つながり合い・支え合い」に変わっています。それを具体的に示した資料②-3の中間成果を見ると地域共生社会という言葉が出てこない。先日、豊田市で第5回地域共生社会推進全国サミット in とよたが開催され、成果があったと思います。その中で「とよた宣言」という宣言があったことから、「地域共生社会」をどこかに書いてほしいと思います。また、資料②-3の直接成果の下から2番目、「地域自治の推進」は、「地域共生社会」の方が良いのではと思います。というのは、地域自治としての自治区の役員の役割と地域共生社会の推進とは違うからです。地域自治区の取組の半分は行政の下請けのようなものであり、支え合いなら「地域共生社会の推進」の方が良いと思います。

(I 委員)

前回の審議会で「こども」を一本の軸にするのはどうか、という意見が出たと思います。これから一番大変になってくるのは高齢者で、こどもが幸せに暮らせられれば高齢者が幸せに暮らせるのか。資料から高齢者たちの幸せが見えてこないと感じます。ウェルビーイングネットワークといって医療、介護、福祉の方々障がい者や高齢者のウェルビーイングの達成の仕組みづくりを行っており、こういったところに行政も関わっていただけると良いと思っています。計画でその部分が抜けていると思いました。また、中山間地域と都市部が近くにありながら全く違う環境がある自治体は珍しい。近くにあるからこそ地域自治や地域の形は違いますが、それをつなげられるのが行政。その視点を当てていくと豊田市らしい計画ができると思います。

(J 委員)

地域が独自に取り組もうとすることには、独自に自由にできるようにしてほしいと思います。

こどもの多様な生き方、暮らし方、つながりの選択の中で、安心して暮らすことだと思いますが、小・中学校においては、解散してしまうPTAも多くある。その理由を聞くと、保護者が役員を担うことを避けるために、こどもを他の学校に通わせているということがあります。昔はPTAの役員は喜んで引き受けたもので、会長の希望者は多かったが、今はなり手もない状況です。こどものためなら当然やるべきで、PTAの廃止はとんでもない話で、こどもは地域で見てほしいといわれるが、親が見られないのに地域で見られません。自分勝手に無責任な親が多いので、こどもを主体に考えるなら親も真剣になってほしい。親もこどものことを考えて取り組んでほしいと思います。

(K 委員)

高齢者クラブにも J 委員の意見との共通点はあります。2030年の前に2025年問題があり、団塊の世代が後期高齢者になるので、介護の手が足りない時代が見えています。高齢者クラブが必要と感じるのは、例えば大きな地震災害が発生した際は、高齢者が一番に復興に動き、驚異的な回復があるのは高齢者の活動があるからです。

高齢化率が30%になってくると高齢者の組織が動かないと何もできなくなる。組織が解散することはあってはならないが、残念ながら会長や役員のみになり手がいないなど縮小化されています。地域は地域のために共生社会として地域づくりをしようと思っても力が出せなくなっています。何事があっても高齢者は動いており、その点も入れてほしいと思います。高齢者のことだと適当にやってほしいという人もいるかもしれないが、そうではないということです。

(会長)

日本の高齢化率が29%を超えようとしています。すぐ3割を超えてしまう。そのような中で、活躍できる高齢者が地域の中にたくさんいますし、今後の社会のことを考えると高齢者が地域自治に関われるという事も大事ではないか。一方で、旧来の自治組織が壊れてきている中でどのように地域自治を考えるのかという事が大きな課題であるという意見でした。

(L 委員)

資料の②-2を見ても、上にこどものこと、その下に人生100年時代といったキーワードとして、大人ないし高齢者のことが書いてあるが、多世代、交流の部分がもう少し出てくると見方が変わると思っています。こどもを柱に置くのは賛成ですが、多世代で何かを支えるときに、大人の立場からするとこどもに大人が支えられるという発想より、大人が背中・姿を見せるのが良いと思います。そういった意味でも、こどもというキーワードがあってもよいと思う。大人とお互いに活動したり共通の価値観を持つ中で、お互いにウェルビーイングが成立するとすれば、二者択一にならないと思います。

学校の問題にも関わっていますが、こどもの数が減っているのも、こども同士の交流は減る一方で、部活動などあらゆる事がやりたくてもやれない。こういった活動を維持しようとする大人もハッピーになるといったことをイメージとして示せられれば、決してこどもだけを見ているのではないと思いました。

また資料②-2の「初期アウトカム」と書いてあるところに矢印が多くてわかりにくい。「こども」という言葉が先に出てきてイメージしやすいが、各項目同士のつながりが整理されると、そこにみんなが関わる、みんなも一緒に関わるという表現が示せると良いと思います。

(会長)

こどもか大人かということではなく、こどもだけを大事にするという話ではない。むしろこどもを軸にすると、みんながこどもに関わりながら、お互いに良い関係が築けたり、助け合ったりしていける、自治に繋がっていきます。さらに、その中でこどもが育てられて将来の担い手になっていくという論点でこどもを軸に考えてきました。こどもを軸に置いた上で大人がどう関わるのか、と言ったところも含めて社会の在り方の構造化が必要という意見だったと思います。

(M 委員)

「(仮称)ミライ実現戦略2030」(案)には、「人の視点」「まちの視点」の2つの

大きな取組方針があります。資料②-5に記載されていることに関連して、そもそも豊田市は車のまちで、中心市街地が活性化していない現状があります。高齢になり、車に乗れなくなった時の問題がどこのまちでも課題になる。豊田市は独特のまちで、駅前のタワーマンションの住民は、駅前で買い物をするのではなく、車に乗って郊外に買い物に行く。車利用が多いことは豊田市の特徴ですが、どのようにまちを形成していくのかが非常に難しい問題であると思います。

(会長)

コロナ禍を挟んで3年ぶりに宇都宮市に行きました。新しいトラムができて、まちの構造が変わり、交通の便も良くなったと市民は喜んでいましたが、免許返納した後の生活の在り方も含めてまちの構造の在り方を考えてはという御指摘だったと思います。

(N委員)

ラベルを張り替えたら同じ計画となるのは本意ではないので豊田市らしい計画にしていきたいと思います。

(O委員)

市民の立場から、学生との意見交換やまちづくりミーティング等での現場の声を第一にしていくことは賛成です。こども達が課題に思っていることや、期待していることに対して、環境、まちづくりをサポートすることは大賛成です。

こどもの意見交換で出た意見が、資料②-1には出ているが、資料②-2以降には出ていないので、どこの部分がこどもの声だったのかわかりにくいです。「直接成果」の粒感を含め、具体的な一歩を踏み込む際に、現場の声を組み込んで具現化してほしいと思います。

次に、豊田市ならではのユニークな部分を取組方針に出してほしいと思いました。これを目指そうと思ったときに既に取り組まれている部分もあると思うので、整理する中で、豊田市ならではの強みを取組目標や内容に織り込んでほしいと思います。

(会長)

ヒアリング等を含め、どのようなことを市民が思っているのかを取り込みながら、自治の在り方や豊田市らしさを出していくことが必要ではないかという御指摘だったと思います。

(P委員)

社会が変化しても必要とする価値は変わらないということを大事にし続けてほしいと思います。

農業に関しては、中山間の農地は非常に深刻で、平地は6割以上が、担い手がいて法人化ができていますが、中山間は1割程度で、耕作放棄地も多く担い手もいない。生産コストもかかり、作り手がなくなっています。また、中山間は、野生のイノシシや鹿といった獣害で深刻な状態です。さらに、農地だけならよいが、10年後には集落も高齢化、限界集落で人がいなくなりますので、農的な生活ができる仕組みがあると良いと思います。

(会長)

未来に向けて変わってはいけない価値があるのではないかと。中山間地農業の大変さや営農を続けられるのか。獣害や耕作放棄地が増えていくことを含めて意欲を失いつつあるのではないかと。さらにそれらが集落の消滅につながってしまうことをどのように捉えていくのか。農的な生活と言われましたが、農林水産省などが、農村RMOという形で、農業経営だけで生きて行くのではなくて農を基本とした新しい生活の在り方を作り出していくという形で、

集落、農地、ひいては環境を維持していくことになるが、施策になりつつある。その他を含めて豊田市がどうしていくかの意見がほしいという御意見だったと思います。

(Q 委員)

昭和の時代が終わっていない。平成は何もなかったという意見がありましたが、昭和は人が増えて経済的に豊かになり、平成はグローバル化が広がったと思います。市場が世界に広がって、良いコンテンツはどんどん大きくなり、そうではないところは切り取られていき、勝ち負けの規模が大きくなった。国境や文化を越えて一緒に働く人が身近になったのが我々の意識や社会の変化だと思います。また、ネットが重要となったのが平成でした。令和は、豊田市の経済界から見ると、国の姿と一部重なるが、人口が減っていくことは間違いありません。平成は人口がピークアウトしても大きな痛みを感じないで済んだのではないかと。世界2位の GDP、人口も1億人を維持できました。令和になって、人口、労働力が目に見えて減ってきており、建設、物流業界の2024問題があり、郵便物が届かなくなったり、家がすぐに建てられなくなったりする。なぜかという人が足りないから。人が足りないことは解消することなく、さらに進み、旅館やレストランといった他の業種でも人手不足になってくる。

豊田市もデジタル化、行動変容で、人手がかからない世の中ができればよいが、そのためには知恵を絞って汗をかく必要がある。豊田市だけが痛みを感じないように済むためには、人を呼び込まないといけないことになり、人の取り合いになると思います。ある意味競争であり、日本国内、県内でも、海外の国からも人の取り合い。円安の状況では、外国人労働者として東南アジアから人が来ないかもしれない。暮らす場所として、他の自治体に比べて豊田市は良いところだと思ってほしいが、それ以前に、働き場所として、働きやすい魅力のある職場環境を提供できるまちでありたいと思います。我々民間事業者は、一つ一つの企業が魅力ある職場を提供しないといけない。その先にこのまちで暮らすことに価値を見出して、いずれ人口流出が止まるかもしれません。

資料にはいろいろな対策が書かれており、今何かが足りないと言うつもりはないですが、大事なのは働きやすい職場、魅力ある仕事を作っていくことです。それは、民間事業者の責任だが、行政も生活者もやれることがある。働きやすい職場づくりとして、例えば子育てしながら働きやすいということや、健全経営を促進すること、豊田市で働くということは家族、自分にとっても良いと思えることです。

次に、未来の子どもたちに必要なものは、我々が考えなくてはならないのではないのでしょうか。我々が子どもたちに地球環境を悪化させたと言われたくないので、環境問題をしっかりやりましょう。教育については、大学生たちが自己実現をしたいと言うが、自己実現には力がいらいます。ワークライフバランスで自由な時間があれば自己実現できるというのも正しいですが、私たちは世の中のため、人のためになりたいという善の気持ちをもって生まれてきています。それを実現するために、一人一人違う能力を持っています。それを社会につなげるのが仕事だと教えられてきました。子ども達にそのことを伝えて、知識、技術を与える、身に付けさせるのが教育で、その教育の機会や選択肢を与えるのが我々の責任だと思っています。子ども目線というのは、教育だと思っています。生きる糧や術を与えるのが教育であり、それを与えるのは我々の義務、責任。環境問題と同じくらい大切だと思っているので、対策のところに入ってくると良いと思います。

(会長)

学生も、仕事の在り方がどうなっているのか。頑張ればなんとかなるという議論をしており、企業に入っても、働き甲斐や仕事を通して社会につながっていると思えない働き方をしているのでは、まだ昭和なのかという議論になってしまう。若い人が働いている、生活している、社会とつながっていると思えることが一つになっていく在り方が求められており、社会や企業、我々の観念が変わらないという面もあるかもしれません。労働力が足りない、奪い合いになるが、どのような未来を選択するかが問われており、若者たちがここで働きたいと思う地域か、住みたいと思う地域を作るのかが問われています。

教育の在り方もそのとおり。何もしないで自己実現はできない。大人が子どもたちと語り合う機会を設け、大人が自分の人生をさらけ出す機会を作っている自治体がある。そこでは子どもたちが大人の魅力に魅せられるというか、自分たちもそのような生き方をしたいという希望を持ち始めているということがあります。私たちは子どもたちとそういう付き合いをしてきたのか。大学受験をして東大に入ればなんとかなるという議論しかしてこなかったのではないだろうか。そういった社会ではないという事を、大人が受け止めて、子どもたちに人生の在り方をどう説いていくのか。自分たちの経験を伝えながら、子どもたちがどう生きていくのかを支援していく。そのような視点を計画の中に入れていきたいという御意見だったと思います。

引き続き、次回の審議会でも本日の「(仮称)ミライ実現戦略2030」(案)を議論していきます。

(市長)

様々な御意見ありがとうございました。振り返ると、子どもが全面に出てきているのは、内部で議論する中で、コロナ禍で今の子どもたちはどうしているかという心配がありました。また、これから毎年いろいろな社会問題が続きますが、今の子ども達が将来50年、60年生きていく中で、大人が想定できない状況の中でどのような社会や仕組みを残していかないといけないのか。あるいは何かを変えていかないといけないのか。そういったことを十分に議論したいことから、子どもという軸が出てきているため違和感があるのかもしれない。

私の一番の問題意識は、資料②-2以降の右側グレーの網掛けの部分で既に予定されている事業がいくつもあり、それを羅列して取組目標に紐づけすると、一見正しいと思うことが出てきてしまうが、それはやりたくない。取組目標を考えるとこんな取組が必要だ、という御意見をいただきたいと思います。積み上げの中でこれから必要な事業があるが、それだけでこれからの時代を乗り越えられるとは思っていないので御理解をお願いします。

また、高齢者の話が出てきており、人の視点が子どもに特化しているので、高齢者の視点を加えることはあるような気がします。今後、高齢者数はそれ程変わらず、高齢化率だけが高まり、いずれ多死社会を迎える。どうやって市民の尊厳を最期まで守るというのは自治体の究極の責任だと思うので、高齢者の位置づけは必要だと思いました。

自治体の名前を変えれば同じという御意見がありましたが、豊田市の強みや広域の中での豊田市の果たすべき役割として、産業中枢都市と言いながら中身に入ると、豊田市での展開に完結している。産業中枢都市としての豊田市の役割については、豊田市の総合計画を超える話も出てくると思っています。多文化共生や都市部と山村部の共生など、先進的な豊田市の取組は、豊田市の中で完結するのではなく、広域で横展開する役割を明確に打ち出すよう

な記載が必要だと思いました。

地縁型組織の区長会や高齢者クラブもコロナ禍でダメージを受けていて、豊田市として地縁型組織を将来に向かってどう考えるかを議論すべきで、総合計画で豊田市としては地縁型組織を重視すべきという方向性を示すのであれば施策も変わっていくと思います。テーマ型と地縁型の動きを、メリハリをつけて自治力を高めていくということが必要だと思います。豊田市の強みや個性にこだわって、豊田市に特化した計画が作れると良いと思います。

(会長)

豊田市らしさ、豊田市の特色を打ち出していくこと。その基本に豊田市民の自治力、当事者性を持ち、新しいまちを豊田市民が作っていく構想の仕方をすべきだと思います。自治、コモンとして、自分たちがまちを作っていくことが改めて問われてきているのではないか。そのことと魅力づくりや産業の在り方、働き方がリンクする中で、豊田市らしい新しいまちの姿が見えてくる。その中で人々が生活している姿が見えてくると思いますので、今後も御議論いただきたいと思います。

若者の意見を見ると、個人をベースにものを考えているのは大事なことです。個人をベースに自己実現という話がありますが、本来我々はずながってしまっているのだというところから話を出発できないか。他人に迷惑をかけてはいけないと言うが、生まれ落ちた時点で他人に迷惑をかけているのだから、それはお互い様。自己実現をする上でも誰かの助けが必要になってきます。生まれ落ちた時点で誰かとつながっている、迷惑をかけているというところから個人の在り方を考える。その議論ができる基盤を持っているのが豊田市だと思うので、それらを含めて次回、御議論いただければと思います。

○事務局

■ 企画政策部長あいさつ

■ 事務局連絡

○事務局 次回審議会日程

: 令和6年1月22日開催

(終了 午後4時05分)